

氏名(本籍)	やま もと まさ ゆき 山本政幸(愛知県)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博乙第1728号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	モダン・サンセリフ活字書体の形成過程に関する研究
主査	筑波大学教授 博士(デザイン学) 西川 潔
主査	筑波大学教授 博士(デザイン学) 原田 昭
副査	筑波大学教授 穂積 毅 重
副査	筑波技術短期大学教授 石川 重 遠

論文の内容の要旨

本研究は、1920～30年代のドイツとイギリスでデザインされたサンセリフ体活字を「モダン・サンセリフ」と括り、19世紀初頭のサンセリフ体活字誕生からこの書体が形成されるまでの過程を明らかにすることを目的としている。論文は序章、本編7章、結章及び付章からなる。第1章と第2章で、モダン・サンセリフの源流となる19世紀のサンセリフ体と、1920年代の芸術・デザイン運動における実験的書体デザインをたどり、第3章と第4章で、同時代に発達した新しいタイポグラフィの発展の様子と表現の特長をとらえ、第5章と第6章で、モダン・サンセリフの成立の過程を考察し、第7章では、その衰退の様子も把握し、結章で総括している。幾何学的な書体デザインを深く理解するために、付章として、ローマン体の分析研究をつけた。

序章では、研究の目的を述べ、先行研究について検討した後、「サンセリフ」の名称、意味、綴りについて分類と整理を試みている。さらに、本件研究のキーワードであるサンセリフ体における「グロテスク」および「モダン」という語について検討し、当論文で使用するための範囲を定めている。

第1章では、19世紀におけるサンセリフ体活字の発達を跡づけている。1816年に最初のサンセリフ体活字が登場し、30年代から太く、縦長で大きなサイズの活字が現れ、並行して小文字も加えられた点、さらに中期以降はイタリックが出現し、極小サイズの活字とファミリーも充実して完成度が高められた点など多数の資料を参考に明らかにしている。

第2章では、モダン・サンセリフ体の登場に影響を与えたと思われる、1920年代の芸術・デザイン運動における実験的書体デザインを追及している。水平垂直線によるミニマムな要素による文字の提案、円や三角などの単純な幾何学図形を組み合わせる提案、定規とコンパスに方眼紙を加えた精密で機械的な作図による提案、小文字のみに限定して組版上の経済性を追及する「シングル・アルファベット」と呼ばれる提案、発音と字体を結びつけようとする「フォネティック・アルファベット」と呼ばれる提案等を考察し、当時の前衛美術・デザイン運動とサンセリフ体が強く連関している点を明らかにしている。

第3章では、モダン・サンセリフ体の登場とほぼ同時期に提唱、実践されたいわゆる「ニュー・タイポグラフィ」と呼ばれる新しいエディトリアルデザインの動きについて考究している。ここでも主役の書体はサンセリフ体であることを明らかにしている。ニュー・タイポグラフィにおいて求められたのは、伝達を最優先し、効率や経済性を踏まえ、最新技術を積極的に取り込み、機械工や職人を含めた集団・共同作業を理想とする、合理的・機能

的精神であり、これは近代的デザイン思想そのものである。

第4章では、ニュー・タイポグラフィについてさらに詳細に述べている。ニュー・タイポグラフィの旗手と目されるJ.チヒョルトが、1937年に提示した、伝統的タイポグラフィとニュー・タイポグラフィとの比較を参考に、後者の特徴を改めて把握するとともに、1925年から35年までのチヒョルトの五つの著作も加えて、サンセリフ体の持つ特徴や新しいサンセリフ体への時代の要請があったことを明らかにしている。

第5章では、イギリスにおけるモダン・サンセリフの成立について考究している。E.ジョンストンと、弟子のE.ギルのサンセリフ体を時代背景も視野に入れて述べている。ジョンストンは伝統を重視した近代カリグラフィの確立者であり、ギルはジョンストンの教えを受け、石彫と刻銘に卓越した実績を挙げた人物である。この二人の知識、技能、経験、哲学が、「グロテスク」と呼ばれてきた19世紀のサンセリフ体でない新しい息吹を吹き込んだ経緯を明らかにしている。ジョンストンがデザインした《ロンドン地下鉄書体》は今日いうところのCIデザインの先駆けとしても重要な書体である。ギルの《ギル・サン》もまた鉄道のサイン計画から書籍印刷まで幅広く対応したが、これら二つの書体は古典的な文字のプロポーシオンを基本としつつも、機械・大量生産のための幾何学的な設計を採用し、モダン・サンセリフの代表的書体と位置づけている。

第6章では、ドイツにおけるモダン・サンセリフの成立について、J.エアバール、P.レンナー、R.コッホの制作した書体デザインを中心に考察している。彼らの書体は英国の場合と同様にカリグラフィの素養が基盤にあること、活字会社など企業との連携で開発が実現したこと、幾何学的なデザインが用いられていることを確認している。一方、ユージェント・シュテイルの自由な文字デザインの流れを汲み、実験的な書体デザインの創造性やニュー・タイポグラフィの影響を受け継いだこと、さらに機械化を積極的に受け入れ、個性を抑えることが明言されていたこと等は、ドイツにおけるモダン・サンセリフにみられる固有の性質であることを明らかにしている。

第7章では、第二次大戦後に「ネオ・グロテスク」と呼ばれて再び注目を集めた19世紀のサンセリフ体活字のリバイバルの経過を追いながら、モダン・サンセリフ衰退の原因を探っている。あまりに純化した幾何学的形態にその一因があったのではないかと著者の考えを述べている。その検証のためグロテスクとモダン・サンセリフの具体的な形態について比較分析している。

結章では、研究のまとめとして第1章から第7章および付章で得られた内容から、モダン・サンセリフ活字書体の形成過程を総括している。

なお、付章では、15世紀から18世紀の間におこなわれたローマン体の幾何学的分析について考察し、モダン・サンセリフ体との性質の違いを明らかにしている。ローマン体における幾何学的なデザインには多分に神秘、権力といった象徴的な意味が込められており、後者には機能や創造といった実質的な役割が求められていたことが主な相違点と指摘している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文はアルファベットの書体に関する研究である。1920～30年代に生まれたサンセリフ体を「モダン・サンセリフ体」として括り、その成立する過程を19世紀初頭に生まれたサンセリフ体（グロテスク）に遡って明らかにしている。アルファベットの書体に関する研究は欧米で盛んになされてきたが、その殆どはながい歴史を有し、書籍用書体として今日なお圧倒的に多く用いられているローマン体についてである。伝統的な活字の流れの外にあって、広告やサイン、パッケージなどの「端物印刷」に多用され、脇役として扱われてきたサンセリフ体に関して、その成立時から20世紀の前半までを体系的に研究した例は欧米においてもごく少ないと思われ、わが国においては本論が初めての試みである。これは本研究の際だった特色であり、タイポグラフィ研究上意義あるものである。いうまでもなくサンセリフ体は今日のタイポグラフィックデザインやグラフィックデザインに欠くことができない重要な位置を占めている。

タイポグラフィの研究の多くは制作者と書体自体の特徴等ごく限られた範囲でなされてきた。しかし、本論文では、モダン・サンセリフ体の成立過程を、ドイツを中心とした20世紀初頭の前衛的な芸術・デザイン運動、あるいはそこから提案された数々の実験的タイポグラフィ、またチヒョルトの提唱したニュー・タイポグラフィの動き、バウハウスにおける合理的アプローチなど、広い視野をもって調査、考察している。こうした方法もタイポグラフィ研究に今後寄与することが予測される。

モダン・サンセリフに該当する書体について、作家、成立の経緯、形態的特徴、社会的背景等を現地に赴くなどして詳細に調査し、近代デザインの萌芽期に現れたデザインの具体的成果と位置づけた視点も高く評価できる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。